

あそ

1

2008





みちのくの  
淋代の  
浜若布寄す  
山口青邨

みちのくの淋代の浜若布寄す

山口青邨  
(佐藤中処蔵)

あを

一月



さを鹿

東京 佐藤喜孝

さを鹿の次はわたくし山の水  
秋の道貼りついてゐるエレキバン  
三上のひとつに居りぬ今朝の冬  
金絲雀が冬のキャベツをたべながら  
福の神てんてけてんと次の家

逃げ易き陽を追うてゐる忘れ花  
枯れ螻蛄微動だにせぬ面構  
冬の蠅老猫の背を好みをり  
魚釣る人に小春日賜りぬ  
軒下に大根も柿も吊すなり

神奈川

鎌倉喜久恵

冬うらら

神奈川

木村茂登子

似顔絵に本音がズバリ冬うらら  
雪吊に松はんなりと納まりぬ  
寒い朝甘味たつぷり玉子焼く  
冬の鏡人につれなくして鬱に  
終り佳しさくらもみぢのきれいさび

東京

篠田純子

もみぢ池まつすぐに行く白き鯉  
ピラカンサきのふの夜のヒステリー  
ひといろになるまで枯れしはちす池  
棒くひとなりたる次第枯はちす  
まゆみ臨川寺の実芭蕉の姿若くあり

泣く男泣かない女近松忌  
猫の喉よく鳴り小春日向かな  
黄落やフランスパンのならぶ籠  
七五三ただ懐かしく見てゐたり  
つやつやと正坐してをり富有柿

東京 芝 尚子

みたりの子安けくあれとお酉様  
三叉路を斜めに渡りお酉様  
政三疎みして冬に入る  
運動会美しかりし母の居し  
白雲と紅葉の里に今を置き

東京 芝宮須磨子

星とんで鍋の蜷のつぶやける  
ゼロでせう降水確率大根引  
蓮枯れしことに拘りゐたりけり  
のぞいてゐる望遠鏡の向かうがは  
手相見に危ふき冬の虹かかる

石川 定梶じょう

ふるさとを持つ隣人の柿すだれ  
くわりんの実もてあましたり五つほど  
秘境めく観音沼の深紅葉  
一夜にてコスモスすべて霜枯れり  
氏神で三歳祝ふゆつくりと

埼玉 須賀敏子

ふる里に語る人なし野紺菊  
柘榴割れ実のこぼれぬし父母の声  
日を追うて切干は香を放ちけり  
冬の虫別れはうしろ振り向かず  
ふり向いて人に手を振る秋の暮

東京  
鈴木多枝子

さくら堤とほく薄ももいろに枯る  
立冬や聳ゆるものに水難碑  
代々の牛馬を埋めし刈田の辺  
曼珠沙華水禍の堤あるかぎり  
権現の絵馬のうすれし棗の実

埼玉  
竹内弘子

白鳥

東京 田中藤穂

感謝祭シチュー人參大切に  
木枯に身を押しされつつポストまで  
到着の白鳥ら鳴き交しをり  
白鳥も夜明けの靄も朱に染まる  
物のなき頃の懐かしあけびの実

落葉掃

東京 東 亜 未

一本の櫟大樹の落葉掃  
気むずかし風と取組む落葉掃  
東屋に色つけてゆくもみぢかな  
蔦もみぢ志んぐうばしの大燈籠  
塵穴の松葉に照葉二三枚

冬 紅葉

三重 長崎桂子

冬紅葉和服婦人の裾さばき  
冬紅葉天まで届く大斜面  
冬紅葉グラスに注ぐ赤ワイン  
咳込んで今果てるかと思ひたり  
夢にまで咳とたたかひ目覚めたり

空高し長白山は聳え立つ  
雲よりも高きに登る眺めかな  
懐かしき故里の山澄み渡る  
峡谷に水の音あり山の秋  
峡谷に奇岩怪石秋高し

愛知 西本春水

竹藪に迷ひこみたる烏瓜  
探せども雲なき空に泡立草  
木瓜一枝しづかにゆれる返り花  
手に触れる湧水ぬくし石路の花  
蜘蛛の巣を残す木がらし第一号

埼玉 早崎泰江

### 筑波山

歩いて冬あるいても冬筑波山  
真ん中に背を搔く柱冬籠  
二人ゐて一人の如し餅を焼く  
老衰や南紀の冬の蜜柑狩  
朝は納豆ゆらりゆらりと春寒し

東京 堀内一郎

紅葉

寒暖の帳尻合はせ紅葉燃ゆ  
冬紅葉女人高野の磴登る  
御開帳観音やさし紅葉寺  
寺への道尋ねあてたる冬紅葉  
野良猫に突き纏はられ落葉道

東京 森山のりこ

枯れ朝顔漁網の柘目余さずに  
拱くは烏の死骸虎落笛  
大屋根に烏の死骸昼の月  
落葉掃く頭上に烏二三十  
非武装地帯広く拡がれ鶴来る

東京 森理和

秋うらら反りて屈みて鍛へをり  
団栗と辞書の供物や地頭様  
ひたすらに咲きて終りしカンナかな  
茶の花や小さき塚の片隅に  
老いどちのつどひて焚火貸農園

埼玉 山莊慶子

あらたま

東京 吉弘恭子

夢々に元朝晴るる予感あり  
あらたまの日本にっぽん晴れに背伸びする  
雲去なし寒満月をまぶしゆうす  
初空に鳥の羽の舞ふ時刻  
年玉を貰ふ齡のいつか過ぐ

千 灯

埼玉 渡邊友七

眠れば千灯ともる菊の中  
笹鳴の奥は縞なす日矢すだれ  
笹鳴やあくがるものとみに減り  
倒れ木の香を放ち冬に入る  
一里来ても波音雁の空昏れぬ

冬茜見舞ひし後の閑話かな  
おむすびの新海苔の香も夜行バス  
やはらかな訛と巡る冬の加賀  
大きめのチワワの見詰む小六月  
冬晴の若きゴルファー衣裳持ち

東京 赤座典子

殿ヶ谷戸庭園

東京 安部里子

冬空に音突きぬける鹿おどし  
もみぢ池これみよがしの大緋鯉  
庭園のくまなく小春日和かな  
時は今石露の花首のぼす  
枝先に光あつめて返り花

東京 遠藤 実

菰を巻く軍手まつさら尼の寺  
蛍光灯はや冬色にをさまりぬ  
隅田川桜紅葉を流しけり  
茶の花や挨拶だけのお付き合ひ  
錠剤を数へて二月の日かぞへ

## 十二月作品より

竹内弘子・佐藤喜孝

秋の蝶抓めばかさといひにけり

佐藤喜孝

永年勤続毛玉の浮きしカーディガン

篠田純子

「蛭蝶」「小灰蝶」などともいい、シジミの殻の内面に似ているのや、灰白色など、小川の縁で同種の蝶が輪を描いて飛んでいるのを見かけると。草の上に凝としているのは動くまでそれと分からない。地味な色合といい、日々衰えていく感じがある。「かさといひ」の擬人化が、かわいた木の葉のようでもある。

走り蕎麦宿の主がごゆるりと

鎌倉喜久恵

無花果の枝の廣がる路地の奥

芝 尚子

「ごゆるりと」という言葉が自然に出てくるまでには時間が掛かっていると思った。「くつろいで、ゆっくりお過ごしください」の意を、みじかく、やわらかく、くどくなく言うのは修業が要るだろうと思う。

「新蕎麦」も上等だった感じである。

季節の変り目に衣服を入れ替え、収納するもの、廃棄処分するものに分ける。シーズンになって取り出した「カーディガン」を、又着用されたのだろうか。「永年勤続」は「カーディガン」なのだと思いました。純子さんらしい面白い句。共感しきりです。

「無花果」の枝は横へ廣がる性質がある。そうでなくても狭い「路地」は、枝を避けて通らねばなりませんね。実が熟れて落ちれば足許が気懸りです。

我家の近くの家の生垣が道路にせり出して、防犯上の理由から注意があったらしく、ある時すっかり刈り込んで明るくなり、歩道が歩きや

すくなくなったことがあります。

### 蓑虫の屈託簞を揺らしけり

定梶じょう

「蓑虫」の雄は成虫になると巢を離れるが、雌は成虫も無翅で、一生巢から離れないそうです。ただ風に揺れているより、「屈託」をもつて蓑虫じしんが揺らしている方をとりたいたいが、さびしいことにかわりはない。

### りんごの木枝はりんごを持って余し

鈴木多枝子

台風らしい台風が来なかったので「りんご」は豊作だったようです。栽培している農家にとつて豊作がすべてででしょう。重さに堪えられない枝があれば予め手当てをしていると思います。

好みのもんだいですが、薔薇や「林檎」は本字で書く方がいいかもしれません。

### 屋久杉の箸かろやかや新豆腐

田中藤穂

鹿児島県屋久島に自生する杉。とくに千年以

上のものは、高さ二十メートル、直径一から二メートルに達するという。良質で木目が細かくて軽い。その杉で作られた「箸」で「新豆腐」をいただく。これに優る美味佳肴はないのではないかと思われる。

### 石燈籠揺す振りてをり萩の風

東 亜 未

「萩」は秋の七草の一つだから、どう吹き荒れても「石燈籠」を揺す振ると思えないが、咲き盛る萩の花が強風に煽られて、そんなふうに見えたのだらうと思った。柔よく剛を制す、詩的誇張法かもしれない

### さくら紅葉耳のうらから眠くなる

堀内 一郎

昼間見てきた「さくら紅葉」が脳裡にある。横向きに寝ていると、「耳のうらから」眠気がおそつてくるのだと思う。私事ながら、腰痛持なので、海老のように横になるのですが輾転反側。掲句のようにはまいりません。羨ましいことです。

かはりだま歌舞伎役者の面長し

森 理和

冬季の「顔見世」に入るのでしょうか。小顔がもてはやされる昨今ですが、「歌舞伎」は、丸顔の亀治郎より、大大した勘三郎や「面長」の海老蔵の方が見映えがするのでしょうか。

コスモスや珈琲豆と陶器の店

山莊慶子

「コスモス」は日当りと風通しの良い所に咲くので、郊外のおしゃれな店を想像しました。句作を再開されてすぐ慶子さんらしい句を自在に作っておられます。

秋の雨遠退く鴉の羽音かな

吉弘恭子

小は雀から鶉「鴉」。雨を避けて遠退いてゆく鴉の「羽音」をしかと聞きとめたのだ。

鴉が軒先で雨やどりしていることはないから、雑食性なので人間の周りで見かけることが多いが、秋冬の夜は集団で眠るといふ。

「髪は鴉の濡羽色」と持ち上げるようなこともいうが、あまり良いことの喩にはつかわれなぬ。岡本太郎は庭に鴉を飼っていた。何かから束縛されない、真に自由な人だったのだと思えました。

(以上 竹内弘子)

今日寒くあしたあさつてあたたかし

堀内 一郎

天気予報のやうな俳句。明日のことは分らないものだ。まして明後日はなほさら。何か希望を言葉に託して断定してゐるやうにも読める。何事も無い句であるが、云ひやうが平明を半歩外したところどころ惹かれた。

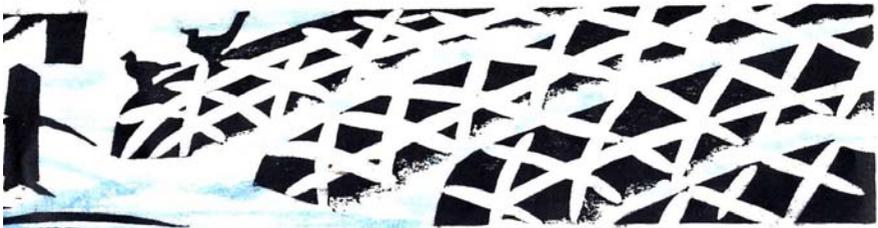
全身が秋風の的となり老ゆる

渡邊友七

友七さんの作句量には驚かされる。その中でも老いは主要なテーマになってゐる。わが身が秋風の的になってゐる、という発想は一概に老いてゐるとは言えない。テーマは老いではあるが、拘る意気込みは若者そのものである。(以上 喜孝)

箸をとり置くまで秋の科かな  
神無月貼紙にある迷ひ犬  
十三夜後ろから来るフランス語  
たまはりし喜寿の齢や菊日和  
永年勤続毛玉の浮きしカーディガン  
無花果の枝の廣がる路地の奥  
秋高し腕に覚へのをりがみ展  
恋知らぬ乙女に榎植歪つなり  
雄物川渡ししの跡に野紺菊  
りんごの木枝はりんごを持て余し  
吸口に青柚の浮かみ七回忌  
転任の教師も居りし秋祭  
石燈籠揺す振りてをり萩の風

佐藤喜孝  
遠藤実  
鎌倉喜久恵  
木村茂登子  
篠田純子  
芝尚子  
芝宮須磨子  
定梶じょう  
須賀敏子  
鈴木多枝子  
竹内弘子  
田中藤穂  
東亜未



## 前月作品

コンビニニ夜長気働きよき娘をり  
山国の空を低くす星月夜  
植木屋の帰りて鶉の声透る  
今日寒くあしたあさつてあたたかし  
秋色や森のカフェの堅き椅子  
深呼吸小菊あふるる四ツ目垣  
輪郭を描きしまゝの画架の薔薇  
夕月夜昭和の歌にゆったりと  
少年の鏡に笑みし十三夜  
全身が秋風の的となり老ゆる  
そこここに覗く苦瓜しやくれ顔  
喜寿となりあれもこれも秋思かな

長崎桂子

西本春水

早崎泰江

堀内一郎

森山のりこ

森理和

山莊慶子

吉成美代子

吉弘恭子

渡邊友七

赤座典子

安部里子

喜孝抄



東京で生まれてまもなく母が病気になる、私は関西に住んでいた祖父母の許に引きとられたそうです。

私を手放し難くなった祖父母の思いや、妹が生まれたこともあって幼少期をそのままそこで育ち、物心ついた時は町医者のお祖父や祖母、住み込みの看護婦さん達やお手伝いさん等大人ばかりに囲まれて暮らしていました。

祖父は忙しい診察や往診の合間に書や水墨画・漢詩等を楽しんでいたようですが、植物を育てることも好み、植木や沢山の蘭の鉢を育てていました。私は時々、蘭の葉の真ん中を手で裂き一枚の葉が二枚になるのを面白がっていました。が或る日、何故この様になるのかと祖父が首を傾げているのを見て裂いたのを内緒にしてやめました。



夏には祖父が丹精した朝顔がピンク・青・紫など濃く淡く花を咲かせるのを楽しみに私は早起きし、花を数えたりしてその一鉢を食卓のそばに置き、みんなで朝食を頂きました。夕方になると夕顔の大きな白い花が宵闇に浮きあがる様に開き始めるのを祖母母と一緒に眺めていました。あの頃すぐ大きく思えた仄かな白い花は幼な心にも印象的でした。

秋には毎年、知り合いから届く大輪の菊の花鉢が中庭に並び見事なものでした。

往診先のお宅で頂いてきた花株を裏庭に植えていて背の高いのや低いのや、地面を這っているのやささやかな花が四季折々咲いていましたし、暖かくなるのと勝手口のポンプの傍のバラが次から次へと淡いピンクの花を咲かせ、祖母が花瓶にさすのを手伝ったりしました。遊び友達のない日々もこのように幼いながら何となく心満たされて過ごしていたようです。

私は今でも四季咲きの淡いピンクの薔薇が大好きで同じ色のを我が家の庭に植えました。毎年、沢山の花を咲かせあの頃の記憶を甦らせてくれます。

# 近世俳諧と漢詩文 参

王岩

青樓曲

起よ君酒に文字かく雪の上 成美

「青樓曲」は樂府題で、婦人に関することを詠むものである。『唐詩選』には、王昌齡の「青樓曲」一首が載せてある

白馬金鞍従武皇、 白馬 金鞍 武皇に従ふ

旌旗十万宿長楊。 旌旗十万 長楊に宿す

楼頭少婦鳴箏坐、 楼頭の少婦 箏を鳴らして坐す

遥見飛塵入建章。 遥かに見る 塵を飛ばして建章に入ること

この「青楼曲」は二首の連作で、『唐詩選』にその一しか録してない。『古今詩刪』には二首とも載せてある。その二は次のとおり

馳道楊花滿御溝、	馳道の楊花	御溝に滿つ	
紅粧謾縮上青楼。	紅粧	謾縮	青楼に上る
金章紫綬千余騎、	金章	紫綬	千余騎
夫婿朝回初拜侯。	夫婿	朝より回り	初めて侯に拜せらる

二首の連作を読んで、その一における「白馬金鞍」に乗った人が、「楼頭少婦」の待ちに待った「夫婿」なのだと分かる。

また「青楼」という熟語は漢詩の中でも、「妓楼、遊女のいるところ」として詠まれた。例えば、「倡女不勝愁、結束下青楼。」（劉邈の「採桑行」）、「对舞青楼妓、双鬟白玉童。」（李白の「在水軍宴司馬楼船觀妓詩」）などがある。

南郭は『唐詩選国字解』においては、この意味を承けて、王昌齡の「青楼曲」についても「青楼」は、傾城屋のことで、羽林の官の少年などの遊びにゆく様子を云ふ。」と書いて、近世の文人たちの好みのままに、「青楼」を「遊女屋」と解釈した。

成美、夏目氏。寛延二年（一七四九）〜文化十三年（一八一六）。通称、井筒屋八郎右衛門。別号に随齋・

四山道人などがある。江戸の人で、足は不自由であった。問題の句は『成美発句集』に出る。成美はその随筆『随斎諧話』で、「予わかき時句読をならひし師は西野老人也。」と書いた。西野老人は『日本詩紀』を編んだ市河寛斎である。天明六年『日本詩紀』を上梓する時、その巻五の校訂を成美が担当していた（石川真弘「成美年譜」和泉書院『夏目成美全集』所収）。ここからも成美が随分漢詩に親しんでいたことは窺い知れよう。

同じ近世の文人であった成美は「青楼」に対する認識も時代の影響を受けたであろう。この句も場面を遊女屋に設定して詠んだものではなからうか。賑やかにお酒を飲み明かした朝、夜来の雪は一面の銀世界を眼下に広がらせる。酔って寝てしまった君傾城を呼び起こして、酔歩蹣跚として外に出た。二人の千鳥足が雪の上に残した足跡は恰も酒に文字を書くように、忽ち降る雪に打ち消されていく。足の不自由な成美が或いは「青楼曲」という漢詩題に触発されて詠んだ作品であろうか。



夏目成美

あふむけば口いつぱいにはる日哉  
いらぬものたゞなげこむや薄原  
うしろからよばるゝ花のたそがれや  
のちの月葡萄に核のくもりかな  
はるの水二階の人のながめかな  
ふはとぬぐ羽織も月の光りかな  
ふる雪にむいて飯くふ小家かな  
涼しさや百合も芒も手にさはる  
大名のもみぢふみゆく小はるかな  
黄鳥やうき世にすまば中二階  
夏と秋と二つにわりし西瓜かな  
家々の親子むつまじ年のくれ  
魚くふて口なまぐさし昼の雪  
元日やゆふぐるるまでささら波  
紅梅や雨のふりたるぬり盥  
重忠が眼ざしに似たはつ松魚  
春の寒さたとへば露の苦みかな  
水にそふて人ゆく春の余波かな

世は暑し膳にむかへば妻子あり  
蟬なくやわづかに見ゆる海の端  
蝶のゆく所はわれもゆきたしよ  
二日見ぬ猫は戻りて松の雨  
二里来ても我にかぶさる雲の峰  
熱き日や百日紅のちりもせで  
蠅打つてつくさむと思ふ心かな  
白魚のすこしまがりて長閑なり  
露の葉のうらはあかるしかたつぶり  
棒さげてゆけば鴨なく沢辺かな  
夢になく我がおとろへや軒の雁  
夕霧の中をふり出す小雨かな  
淋しさにつけて飯くふ宵の秋  
いざよひの小ぐらき松の横たはり  
一茶  
家をゆづりて露に寝るころ  
成美

ひと時雨するや五月の雨の中  
士朗  
世人みななけなけほとゝぎす  
成美

特別作品鑑賞 あわゆき

佐藤喜孝

吉弘恭子



### 枯野驛鳥をながめうごきだす

目的の駅に下り立った。東京の町なかに住んでいると季節のうつろいの微妙な変化に私は疎くなつてなつていっているようだ。気が付いたときには、街路樹の銀杏が黄色く桜の葉が赤くなつていた。変化の過程をもっと大切に見ていきたいと思つているところです。駅から眺める木や草の色の落着いた色の中に鳥の黒い色が際だった。寒い地方の人々にとって冬の季節は生活する上で大変である。ましてや自分で物を生産できない虫や鳥にとっては正念場をむかえる季節でもある。そんな鳥に目がとまってしまった。鳥を眺めてから動きだしたと……。……。鳥が嫌いでないことがよく分る。好きとか嫌いなどという直接的な言の葉でいわなくても十分秘められた感情があらわれ

ている。

### 椿落つ息あるうちに天に對く

椿は桜などのように花びらがばらばらになって散つてしまふのではないことは、知つていることと思うが散つてしまつても生きてゐるのであるうか。作者は散つて地面に落ちた時椿の息づかいが聞えていたのであるう。微かな息づかいを感じ、散つた直後に天を向いた椿の意志を感じたのであるう。散つたとき・木に咲いていたとき・蕾だつたときと短い花期にも椿にある意志は作者に伝わつたように思う。「天に對く」で地に咲いてゐるかのような椿の美しさが確かに感じられた。

### 白髪を湯壺に浮べなごり雪

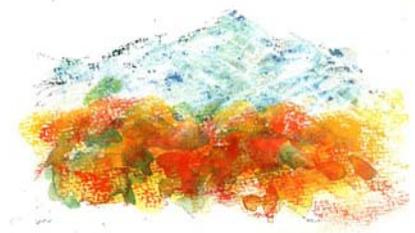
温泉の外湯に入つたとき、雪がちらちら降つてきた。冬のどかどかと降る雪でなく春のすぐ解けてしまう雪であろう。あたたかい温泉に入つていながらに雪を見るということはなかなか体験することができない。東京にいと冬でも一回も見ない年もある。旅行へ行つたときの醍醐味でもある。白髪の色・なごり雪の白同じい合う合いがそれぞれに邪魔にならなく主張していて趣のある作品になつた。

# あをかき集

秋の蝶  
銀杏  
話

堀内一郎 選  
(六人目以降五十音順)

秋の蝶 守衛まつすぐ前を向く 東 亜 未  
自転車の前後子を乗せ秋の蝶  
霧になる誰にともなく話しかけ  
秋の蝶行く先をふと思ひ出す  
境内の銀杏果肉ばかりなり  
四つの児話止らぬななかまど



東 亜 未

周囲は秋、「まつすぐ」で課せられた  
任務の重たさを感じる。住人は大方高  
官でいろいろ取り沙汰されている。緊  
張に夫制服姿と秋蝶の自由な動きは対  
照的。うちの処は防衛省に近く問題を  
含む一句である。

森 理和

古里で明るさは見え、明け放されて

古里は明け放されて秋の蝶 森 理和

兄弟で拾ひし銀杏母が炒る

秋の蝶手元を照らしビーズ編む

お氷川さま銀杏拾ひに裏開く

銀杏や餓鬼大将の兄先頭

会話無く気詰りも無く秋暮るる

日盛りに碧のかがやく秋の蝶

銀杏を煎れば弾けるトランポリン

銀杏を添へ食堂のランチかな

秋日和話もりあぐ和菓子かな

十三夜窓辺に話長びきて

なんとなく話とげあり冬瓜剥く

ほろびざるものにすがりし秋の蝶

相寄れるうからの墓碑に秋の蝶

銀杏落つ知恵兆す子の熱去れば

銀杏の屋根に音して夜の樂し

長崎桂子

渡邊友七

に解放感が籠められる。母のこと鎮守のこと幼き日のことども賑いを彷彿させる。

現在の静けさは秋暮るるの充実の日々の淋しさであろう。

長崎桂子

明け暮れに余裕を見せる。トランポリンの邪気の無さ、「食堂」「和菓子」と食欲も旺盛のよう。話し好きで交際も活発。中には面白からずのお方も、平和な冬瓜と話のとげは人間関係の醍醐味である。

渡邊友七

「ほろびざるもの」、良きにつけ悪しきにつけ秋蝶を人に置き換えてよめる。皆ほろびつつ、すがりつつ。「相寄れる」に伝来を感じ「銀杏」の「音」は応答に聞こえ救いにもなる。「鴨渡る」「墓洗ふ」に土臭く広々と鷹揚な境位。

法話聞く寺の備へに鴨渡る  
もう愚痴を話さずまに墓洗ふ  
誰も死を心の隅に秋の蝶

鈴木多枝子

秋の蝶手品のやうに人逝きぬ  
花に来て軽き目まひの秋の蝶  
ふる里は知る人ぞなく銀杏落つ  
三毛猫が飛びつきたくて秋の蝶  
秋の蝶水車は銀のしぶき吐く  
秋の蝶生垣に沿ひ急ぎをり  
銀杏の黄深まってぬし帰り道  
銀杏を最後に愛でる茶碗蒸し  
くひちがふ昔の話秋日傘  
世話女房は落語の世界吾亦紅  
庭よぎる終の棲家へ秋の蝶  
立話し肩越しよぎる秋の蝶  
銀杏の葉こがね色して闇の中

安部里子

赤座典子

鈴木多枝子

独白はみな同じ。手品のやうにとは、あつけ無さで、悲しみを越えて俳諧の懐に。軽き目まひは軽きに、ふる里は思い出と変化の空しさ。三毛猫、秋の蝶に作者は変化の光を求めている。

赤座典子

「生垣に沿ひ」に、「帰り道」等作者は僅かな処を見逃さない。その重なりが、いつか突然佳品を生む。「世話」と「世界」の絡みは面白い。

安部里子

「秋の蝶」は自分でもあり「棲家」は魂の落ち着く処。読者に安堵感をおくる。「肩越し」とは閑静な界隈。

遠藤 実

明るい黄色の大樹、或は並木道はそれぞれに思い出を語らせてくれる。墨絵世界、電照菊に狂える現世を嘆き自

黄落や銀杏並木の坂下る  
伐られたる黄葉のさかり大銀杏  
戦史知る大樹銀杏落すかな

遠藤 実

銀杏散る全学連の夢の夢  
住まうなら墨絵の世界で秋の蝶  
秋の蝶電照菊の虚ろかな  
毛糸編む恋の話は遠くなり  
秋蝶のゆらりと眼翳らしぬ  
どこまでも離れず即かず秋の蝶  
銀杏の匂ひ東大包み込み  
秋日和犬侍らせて立ち話  
長電話片手は胡桃まはしつ  
在りし日の実朝銀杏黄葉かな  
束の間をうつろふ命秋の蝶  
しなやかにみえてしたたか秋の蝶  
うろ覚えの手話してみたり風邪ごもり

木村茂登子

然を顧みる。

鎌倉喜久恵

「離れず即かず」は「即かず離れず」  
が良さそう。銀杏の香に名門が可哀想。  
立ち話に犬を困らせたり。リハビリの  
胡桃回しとは忙しい。それだけお元氣。

木村茂登子

銀杏が鎌倉の歴史を語る。この作が  
銀杏では一番納得できる。小学校五年  
生の時の遠足が懐かしい。俳句とは読  
者サービス、施しかも。「菊花賞」男の  
愚かに純情に。

定梶じょう

轍で風景が見えてくる。蛇かごに豊  
かな時間が流れる。反面、「田んぼ売る」  
に農村事情を感じ「落穂」と被せた処  
は大変深刻である。ひとしきりの無常  
感を殊更に。

菊花賞の馬の話など男たち  
秋蝶の轍にとまることしばし  
定梶じよう

秋の蝶午後より蛇かご日のあたり  
田んぼ売る話がすすみ落穂かな  
粗穀にしかける話 鶴 畏  
ひとしきり散りひとしきり銀杏かな  
人間の中ににんげん秋の蝶

篠田純子

ひとつ花に肩寄せ合ひて秋の蝶  
銀杏の下で悟りの話かな  
銀杏大樹押しも押されもせぬ学校  
銀杏や男同志が好き合つて  
秋の蝶ひらひら前を墓の道

芝 尚子

秋の蝶墓石に止まり何思ふ  
たぎつ瀬を渡りきりたり秋の蝶  
秋の宵みねおむる猫に話しかく  
しみじみと身の上話秋の人

篠田純子

人間の中に、にんげん。何となく生臭い。今、話題の対象者を象徴して言うようだ。「肩寄せ合ひ」、「押しも押されも」にクールな作者を見る。「男同志」に悪寒が走る。

芝 尚子

墓の蝶は故人の化身と想っている。墓道の先導もするし、見守つてもくれる。と、私は勝手な想像をしている。身の上話も話相手があればこそ。

芝宮須磨子

留守の家、邸であろう。最近物騒。それら気になる面倒見の良いお方。聞き手にもなり無駄話のおつき合ひ。夜食も落ち着いて食べてなんか居られない。

須賀敏子

秋の蝶木下に舞ひて留守の家  
芝宮須磨子

自慢話聞き手となり蒸し芋  
話下手聞き下手そろひ夜食どき  
秋の蝶探して暮れた遊歩道

無駄話果てなく続け木の实剥く  
ひらひらと唯ひらひらと秋の蝶  
須賀敏子

銀杏や女性市長を選びけり  
世話好きの長女の白髪菊日和  
今年酒昭和の話声高に

覚悟して話の相手秋の旅  
胸厚き月光菩薩秋の蝶  
田中藤穂

まなうらに色残し去る秋の蝶  
忘れもの探しにきたる秋の蝶  
九十才の師がころぶなと秋の蝶  
銀杏を食べつつ話しづかなる  
金木犀小学生の立ち話

早崎泰江

女性市長、選挙時なので面白いが、「や」「かな」が良くない。「長女の白髪」世話好きは誰かに似て。「覚悟して」は気の知れた親友であろう。でも貴女が頼り。

#### 田中藤穂

女身の艶を感じる。秋蝶のもの淋しさの強調により一層重みを加えた。

「忘れもの探し」は作者に会うためにと錯覚しても良い。私の独りよがりだが。

#### 早崎泰江

小学生が大人びて見える。背景が金木犀だから勉強のことかも、遊びではないらしい。気がかりに、引き返すことなく無視された。「思はず背筋のばしをり」に立ち尽くす銀杏と息通う。

#### 森山のりこ

死の話題避けて通れず秋深む  
ひらひらと気がかりに飛ぶ秋の蝶  
引き返すことなく去れり秋の蝶  
銀杏黄葉思はず背筋のぼしをり  
ゆらゆらと風にまかせる秋の蝶

森山のりこ

秋の蝶 森のカフェで長話  
秋の蝶 何時もピンクの似合ふ女  
銀杏を炒る香流るる禅の寺  
面倒な話の続き 銀杏むく  
亡き犬と話しする庭菊盛り  
秋の蝶 小犬からかひ低く飛ぶ  
おなじ花にいつもと同じ秋の蝶  
銀杏の香に思はず息を止め  
濃く淡く広場に抜ける銀杏道  
顛顛にぐぐつと力秋の蝶  
松葉杖 銀杏並木で手をつなぐ

吉成美代子

吉弘恭子

ゆらゆらとは自身の姿勢でもあろう。なるようになれの大らかさ。森のカフェに話も弾む。女性は雰囲気に弱いもの。禅寺は固有名詞にしては例えば「銀杏を炒る香流るる平林寺」。

吉成美代子

亡き犬、淋しさと菊の明るさ、つぼは心得ている。からかひ、は俳諧。余裕十分と言える。濃く淡く、は作者の反映である。尚、下五変換で句は花ひらく。

吉弘恭子

「顛顛」の力み、「秋の蝶」の渋味が滲んで妙。松葉杖、良い交歓風景で安心して読めた。「脱兎のごとき」は焦りを感じる。「みなみへ」は意味深く夢希望を孕んでいる。

漂ひて脱兎のごとき秋の蝶  
秋の蝶追ふてみなみへ風うごく  
秋の蝶煙草自販機故障中  
妻と歩いた五十年秋の蝶  
銀杏手にかさなりて小さき旅  
話から話へマスク同士の目

堀内一郎



## あを吟行会のお知らせ

吟行地 上野動物園

日時 2月18日(日) 午前11時

集会場所 都立庭園美術館の庭園

交通 JR山手線、東急目黒線 目黒駅(東口)

より徒歩7分

都営地下鉄三田線・東京メトロ南北線

白金台駅(1番出口)より徒歩6分

句会場 白金台福祉会館

申込み〆切 2月15日(木)

観梅吟行会です。

申込先 佐藤喜孝 090 9828 4244

楓若葉の巻

見あぐれば楓若葉の漉すひかり

ビルの谷間を掠む燕

夜行バス空席多く走り出て

山の相すまたのほのとあらはる

朝の月思はぬほどの高みにて

帰りし猫の草虱とる

爽涼のゆつくりと囁むおぼんざい

テレビに歪む宰相のかほ

笑ひこけ恋にはならず手をはなす

口説かれるままくどかれてゐる

影を踏み影をふまれて隅田川

対岸の町明りまたたく

バス終点六条山に月寒し

虎落笛きき家路をいそぐ

寿司折の紙紐指にひつかけて

飛飛びひ六方を見損なひたる

花あかり声色上手き男をり

朝寝してゐるおきやんな娘

起首 二〇〇七年六月四日 於中野坂上「ジヨナサン」

不寝

音々

猫

投網

糸つ

竹洗

不

もも

波

不

音

猫

投

糸

竹

も

波

不



巢から落ちかそけく鳴ける雀の子  
電柱並ぶ湯の町銀座

二階より三味の音洩るる夕まぐれ

橋のたもとの街灯あはし

苗売の売れのこりたる苗に水

路地を出てくる浴衣の二人

明眸の女優を愛し娶らざる

写真を今もひそやかにもつ

手をかざしきほひて眺む槍ヶ岳

雲間より現る子連れ三組

名月のお供へ芋にケーキ添ふ

ひとりふたると減る踊の輪

払暁の露の底ひに逃げしもの

時のきたりて蛇穴に入る

常々の竹輪麩に味しみてをり

幼馴染みの突然来る

みよし野の花の盛りにまた逢はむ

少女となりて春風に舞ふ

満尾

音 猫 不 音 竹 波 も 不 音 糸 不 音 糸 音 糸 音 糸 音 糸 音 糸 音 糸 音 糸 音 糸 音 糸

二〇〇七年十月七日 於中野坂上「シヨナサン」



あをキーワード俳句辞典

胃

露味噌や胃の腑静かに引き締まる

篠田 純子

胃袋の検査に挑む開戦日

松本 米子

泪して胃散にむせぶ夜の野分

渡邊 友七

胃袋をカメラが捕ふ春隣

鈴木多枝子

胃薬を飲み満月を探しに行く

田中 藤穂

家

山査子の花ある家の売られけり

鎌倉喜久恵

彌生の家をみなへしほど身をかがめ

佐藤 喜孝

病院に手を振つて秋の家路なる

堀内 一郎

犬の待つ家路いそげり散る木の葉

山莊 慶子

薔薇咲く日口紅買ひに家を出る

森山のりこ

遺影

赤シャツの遺影微笑む吾亦紅

森 理和

臍たけし人の遺影は微笑まず

赤座 典子

初桃をむきて遺影に二分ほど

芝 尚子

葱坊主遺影抱く子の泣かれけり

定梶しよう

遺影の父笑うてみえし栗ご飯

斉藤 裕子

如何

桜咲く如何に伝へん友垣に

芝宮須磨子

植痘瘡永田町に如何物師

吉弘 恭子

隼人瓜漬物如何棧敷席

赤座 典子

郭公の神は如何なる所存なる

森 理和

如何様にも為さるがままに蚯蚓鳴く

東 亜未

息

寒牡丹苞より吐息洩れてきし

後藤 志づ

預かりし児のはや寝息春の風

吉成美代子

古民家の梁のため息大暑かな

安部 里子

稚児車息吹きかけて旭岳

須賀 敏子

ときどきは息を調べ秋の蟬

鈴木多枝子

異国

春塵や異国の人夫声高に

芝宮須磨子

松飾る異国の町を通りけり

西本 春水

青葉光異国のあの木この木どち

東 亜未

温室に暫し異国を楽しめり

芝 尚子

黄檗の異国めく寺春埃

篠田 純子

十二月の句会

傳 中野区 カフェエ

あを吟行会

殿ヶ谷戸公園

斑鳩の姉よりメール柿紅葉  
身を反らし頬あかあかと焚火せり  
泰江 弘子

連句勉強会 毎月第1日曜  
中野坂上 佐藤喜孝  
(090-9828-4244)

吉か凶か銀杏あまた落ちる朝 寒林

義母のアルバムに我へーシあり冬隣 裕子

ゆつくりと七歩前進枯蟻螂 綾子

親孝行したかと自問菊供養 喜久恵

立冬や歯ぐたへありし手打蕎麦 藤穂

雲に乗り水の上動く紅葉かな 恭子

毬栗や虫やはやはく這ひ出つる 理和

竹藪に迷ひこみたり烏瓜 泰江

顔さむし人につれなくして鬱に 茂登子

猫の喉よく鳴り小春日和かな 尚子

アワダチサウばかり杓掛時次郎 喜孝

世話好きの長女の白髪菊日和 敏子

蕎麦搔を試してみたる病上り 典子

七座

中野区 小川苑

隈壁にかくれるやうに鶉の羽根  
藪葵のうひうひしくて白蟻ぐふ  
茶の花の蕊丸々と俯けり  
手に触れる浦水ぬくし石路の花  
庭園のくまなく小春日和かな  
つばききの伸びきつてあゝ冬の蜂  
池映る冬の紅葉の濃く淡く  
美代子

調句会 毎月第3金曜  
岸町公民館 竹内弘子  
(0488-86-3501)

調 さいたま市岸町公民館

秋つらら反りて屈みて鍛へをり 慶子

行く秋や動く歩道の窓に雨 綾子

日のさせば枯草枯れの音たてる 敦子

一人居の灯に迷ひ来し虫追はず 友七

十三夜箸を洗ひてもどしけり  
のつけからゆれるつもりの芒かな  
行く先をふと思ひ出す秋の蝶  
読み止しの頁に眼鏡栗名月  
浅草橋行き来忙しき秋の暮  
少年の鏡に笑みし十三夜  
搔き分けて銀杏拾ふ箸の先  
満月の箸曇古墳何か動く  
白根山ガスがかかり来草もみぢ

七座句会 毎月第4火曜  
小川苑 吉弘恭子  
(090-9839-3943)

喜孝 木枯 東亜未 理和 須磨子 恭子 尚子 藤穂 多枝子

あを吟行会 二月第3日曜  
庭園美術館の庭園  
佐藤喜孝 (090-9828-4244)

傳句会 毎月第2火曜  
カフェエ 森 理和  
(03-3368-4263)

十二月の表紙は何が映つてゐるか分らなかつたでせうが東大校内の「三四郎池」です。池の面は落葉で埋め尽され半分ほどしか水が見えない状態でした。一月号は、昨年雌雄で尋ねてきた鴨です。傍まで来てエサをたべておりましたが、今年は全く姿を見せません。鳴声も聞きません。心待ちにしてゐたのですが……。

先月号の

山を抜く力も折れて松の雪 大高子葉

に分つたやうな分らない解説を付しましたが、王岩先生より左記のやうなお知恵を頂きました。

「山を抜く力も折れて松の雪」という句を始めて読みました。先生の「あとがき」を読んで、源五が赤穂義士の一人だろつと推測できましたが、そつでしようか。(さつです 喜孝)

「山を抜く力」という表現を読んで、すぐ、項羽の「垓下歌」を思い出しました。垓下で劉邦に囲まれた項羽は虞美人に

力拔山兮氣蓋世、時不利兮驩不逝

驩不逝兮可奈何。虞兮虞兮奈若何。

源五はこの詩を知つていただろつかな。

もやもやしたものがすつきりした。ここにも漢詩の素養が必要とは。江戸の人の教養が中国の漢詩文により培はれてい

たことを改めて知らされた。ちなみに訳文をご紹介する。

「私の力は(動かないものの代表である) 山をも動かす程強大で、氣迫は(広いものの代表である) この世の中をおおい尽くしてしまう程なのに、時勢は私に不利であり、(愛馬の) 驩も進もうとしない。驩が進もうとしないのを、もはやどうする事もできない。(それよりも) 虞よ、虞美人よ。そなたの事を一体どうすれば良いのか。(喜孝)

### ご厚志多謝

大山夏子様 木村茂登子 篠田純子様  
芝 尚子様 田中藤穂様

二〇〇八年一月号

発行日 一月十五日

発行所 東京都中野区中央2・50・3

電話 090・9828・4244

印刷・製本・レイアウト

佐藤喜孝 竹徳房

カッタ／恩田秋夫・松村美智子

表紙・佐藤喜孝

会費 一〇〇〇〇円(送料共)／一年

郵便振替 00130・655526(あを発行所)

乱丁・落丁お取替えます。